

親と子どもの社会性獲得に向けた子育て支援の現状と課題

- 社会化をサポートする地域社会の子育て支援に関する一考察 -

701-013 坂本 祐子 指導教官 大宮 登

The Present Condition and the Subject of Child-Rearing Support
for Parents and Their Children to Acquire the Ability to Live a Social Life
- A Consideration about Child-Rearing Support of the Community
which Supports Socialization -

Yuko SAKAMOTO

はじめに

近年、日本社会において、育児に当たって悩んだり、不安を抱いたりする母親が増加し、痛ましい虐待事件も頻繁に発生し、急増していることが社会問題となっている。本来は多くの人に関わって行われてきた子育てを、現在は主として母親が担う社会のシステムが続いている。日本での母親が子どもを育てるべきであるとする主張(「三歳までは母の手で」という言葉に代表される)は海外の乳幼児精神医学や母子関係論の流れを汲むものが多い。しかし、そのような母子密着型の育児を生み出す理念がかえって、母親を育児不安に陥れ、親と子どもの社会性を失う結果を帰結させている。また都市化による地域コミュニティの希薄化、核家族化、性別役割分業などにより家庭や地域の子育て機能が低下していることなども育児不安の大きな要因であると言える。

そこで、母親に育児負担を強いることになってしまった背景とその密室育児から生まれた社会病理を検証し、問題点を明らかにし、地域で子どもを育てるという視点から地域コミュニティの再生を考え、親と子どもが社会性を育み、豊かに地域の人々と関わる場としての地域の育児支援構築を考えたい。

第1章 母子関係の神話と社会病理

ポウルビィは母子関係の神話と社会病理に関して、母親が子どもに援助行為をなす動機および必

然性を、出産した子どもに対する母性としての養育本能であるとか、母親が育児をなすべきであるという社会的責任として説明する。この三歳児神話の影響によって、子どもを持った女性が育児に専念する傾向は変化なく、それが母親の生活を狭め、子どもに密接に関わることだけが「良き育児」とする母性観や育児観をもたらし、結果的に母子癒着の温床を創り出していったと言える。

前述したように、日本社会では母性神話が根強く存在しており、「子どもを産む女性は生来的に子育ての適性を備えているはずであり、母親となった女性は子どもの養育に専念することが子どもにとっても最善である」という母性観が根底にある。この母性観は、子育てを女性の役割として強調し、女性が子育てに向いている母性をもっているのであると考えられたため、子育てに多くの人が関わる可能性を狭め、女性の社会参加や男性の家庭参加に様々な問題を残してきた。

大日向雅美の1994年の全国調査により、「子どもが可愛く思えないことがある」母親は48.4%、「子育てがつらくて逃げ出したくなることがある」という母親は91.4%という結果が出たことから、現代の母親の大半が子育てをつらく感じていることが分かる。子どものしつけや教育に悩み、子育ての大半を母親一人で担う生活は大変なものである。子育て支援施策として「親のリフレッシュ」のための一時保育も進められているが、子育てはストレスがつきものだから少し休むためという程度で、母親が自分の時間を持つために子どもを託すのは当たり前という感覚とはかけ離れているし、母親自身も自分の時間を作るために子どもを預けるということに抵抗がある。実際に新聞の投書欄にも「子どもの長時間保育を充実するよりも、子ども達とたっぷり過ごせるように親を家庭に返す社会的支援をして欲しい」という意見もあり、まだまだ女性自身にも「子どもは母親がつきっきりで育児すべきだ」という考えが根強い。育児に専念する生活が社会との接点を失って、母と子の密室状況に置かれる事は母親を育児不安へと追いやっていると言える。

また、現在の日本では核家族化が進行し、都市化により近隣関係も希薄化、少子化が進んで周囲に子どもがいないなどという家族を取り巻く状況が、母親の育児不安に大きく関連していることも考えられる。そこで、次に密室育児や母親への育児の押し付けから生まれる社会病理についてみていきたい。

密室育児により生まれる社会病理その背景の一つとして強い育児ストレスがあり、密室育児がある。密室育児の状況は母親も子どもも社会と関係を持つことが難しいため、社会性を喪失した状態に陥ってしまう。母親は子どもと二人の世界、子どもは母親との二人の世界に閉じこもり、他との社会的関係を結べない状況にもなっている。母親は母親で他人の子供を知らず、自分の家の子だけしか知らないために、子どもの一つ一つの行動がもしかしたらおかしいのではないかと悩み、子どもも子供同士で触れ合う機会がないために子ども同士のコミュニケーションをうまくとれなくなってしまふ。育児は女性が最も適しているとする母性観によって、母親達が社会から閉ざされた狭い環境におかれた中で、母親達は育児だけを生きがいとし、良い母親にならなければと思いつめていく。

このように家庭や地域における子育て機能の低下、親と子の密室育児により親と子の社会的閉鎖

性が生まれ、母性神話を基にした女性への育児責任の押し付けなどといった要因が加わり、育児不安、育児ノイローゼ、幼児・児童虐待という社会病理をもたらしたことが明らかになったと言える。

第2章 少子化時代の地域に開かれた子育て支援

大日向雅美は、母性愛神話に対して典型的なタイプを4つに分類している。それは、①“産む能力=育てる能力②三歳児神話③聖母説④の母親イコール人間的成長説である。①は、子育てが母親を人間的に成長させる面ばかりを強調する母性観であり、問題なのはこの神話に依存した母親が、子どもを持たない同性に対して「子どもを産んでない女性は未成熟である。」という言葉の暴力が発生することである。

このように、これまでの母性観は女性のみが育児の適性を備えているとするもので、子育てを一人母親の責務とする社会のシステムが続いてきた。この従来の母性観が子どもに与える影響を改めて考え直さなければならない時に来ているのではないか。

また、未就学の子どものうち保育所を利用している子どもと幼稚園に通う子どもはそれぞれ約4分の1で、残りの約半数は家庭で保育されている。子育てに対する不安を持った親は、子育てを学び、子育てに自信をつけることができる機会を必要としている。また、親同士が子育てを共有し、身近で子育て相談を行うことができるような場を求めているのである。最近では保育所や幼稚園を利用しない子どもを持つ家庭も対象に子育て相談等の子育て支援活動を実施する幼稚園や地域子育て支援センターを設置している保育所が、94年度の118カ所から2000年には1376カ所に増加している。

経済社会の変化や家族の多様化にともない、家族や地域の子育て機能が低下する中で、社会全体で子育てを支えていくという考え方が重要になっている。子どもは家庭という環境の中だけで育つわけではない。本来子育ての本質は地域社会の共同事業そのものであった。しかし、産業化、都市化、過疎化といった社会変化の影響を受けて、地域社会にコミュニティとしての機能が失われてしまい、子育てが家庭、親といった個人の問題として捉えられるようになってしまったのである。日本では、子育ては親（特に母親をさす）の責任であり、「他人に迷惑をかけない」という社会的規範が強いこともあり、助けて欲しいということを出しにくく、また気軽に助けにくい社会になっているとも言えるのではないか。

ごく幼いときから、子どもや大人などいろいろな人々と交流することで、子どもの発達は支えられているのである。子どもにとって「自分は愛されている」と感じさせることは、母親、父親だけでなく、保育園などを含め、親以外の大人に愛されることも子どもの社会性を育てる上で大切なことである。

地域における子育て支援の取り組みは数多いが、ここでは、子育て広場や子育てサロンなどの出会いと交流の場を提供しているNPO活動を紹介したい。

神奈川県横浜市のNPO法人「びーのびーの」は、乳幼児とその親が集える、気軽に行くことができ、乳児と親と一緒に和める場所がほしいという思いで当事者である親たちが創設した施設である。このスタッフも子育て中の母親達で、会員である一方でボランティアで参加をしている。子育て中の母親達の活動は、多くの人たちに支えられ、まちづくりまでに発展していると言える。

厚生労働省の施策として実施されている保育所等に設置された地域子育て支援センターでは育児相談や育児講座、子どもと遊ぶプログラムを実施しているが、常時開設しているわけではないので、いつでも困ったときに利用するという形にはなっていない。

少子化・核家族化、地域コミュニティの崩壊といった背景の中で、あらためて社会全体で子育てを支えていくという考え方が重要になっていることを確認し、子育ては、家庭や親だけの責任でなく、地域の責任でもあることを明らかにした。「子どもは社会の財産である」という考えのもとで、子どもも親も社会的な関わりを豊かにし、様々な人と関わって生きていく事の重要性も強調したい。

第3章 親と子の社会性獲得に向けた地方自治体の試み

—群馬県高崎市・群馬郡倉淵村・東京都武蔵野市の事例—

高崎市第二次子育て支援計画の中で、本稿のテーマである社会性獲得との関連で、特に注目したのがファミリー・サポート・センターである。このシステムは、働く女性の支援であると共に、孤立しがちな子育てを地域に開いていくための支援でもある。会員数や活動件数も開始から伸びており、活動件数と就業会員の活動件数とはほぼ一致しており、実際に仕事を持つ会員が利用していることが分かる。また、ファミリー・サポート・センターの活動を通じて、母親同士が友達になったり、年2回の会員同士の交流会を通じて悩みを解決することができるという。

しかし、市内地域によって「まかせて会員」のばらつきがあるため、活動できない会員が多数存在することが第一の課題と言える。つぎに、母親がパートなどのために利用しようとする、費用の負担が大きくなってしまふのも課題である。さらには、親同士の関係が固定的になってしまい、社会的な広がり期待できないこと、育児の専門性に欠けている点や、集団になじめない親たちに対しては専門家のアウトリーチによる直接的な支援をすること、市民の主体的な活動をサポートする子育て支援のネットワークをつくる事なども今後の課題であると考えられる。

次に社会性獲得に向けた倉淵村の試みを紹介したい。アンケート結果から分かるように、子育てに関する相談・情報などでの不安等について、「育児疲れ等からのリフレッシュを図るときに、子どもを預けるところがない」において、男性が18.5%であるのに対し、女性が29.7%と大きく上回っていることから、育児をする母親に疲れがみられることがわかる。

村の子どもをめぐる問題は様々であるが、より深刻な問題の一つとして、不登校が挙げられる。村内で不登校になってしまうと、狭い地域の中ですぐに話は広まり、ますます学校に行けない状況を作り出してしまっている。そのような不登校の子どもをフォローするソフトもハードもない。ハード面は財政的に困難であるとしても、せめてソフト面の支援だけでもあると不登校児もその親も安

心して生活できるのではないかと思う。

倉淵村のような中山間地帯の少子化は深刻である。同年代の子どもは近所にいない。車を走らせて「友だち」に会いにかなければならない。いわゆる「田舎の子」は、豊かな自然に囲まれて、友だち同士のびのびと生活しているように考えられがちだが、中山間地帯の子どもは社会性獲得は非常に難しいのが現状である。いかにして子どもが社会性を獲得できるシステムを工夫するかが今後の課題であると言える。

最後に武蔵野市の事例であるが、武蔵野市には、「0123吉祥寺」という市の直営ではなく、新たに設立された「武蔵野市子ども協会」が運営する形をとっている0歳から3歳までの子どもとその親がいつでも気軽に遊びに来ることができる子育て広場がある。

この「0123吉祥寺」は、子ども達の自由に気軽に遊べる場、親同士の交流・学習の場、子育てについてのさまざまな相談に応ずる場、子育てに関するさまざまな情報提供の場として機能を果たすよう考えられている。

親も自分の子どもだけでなく、様々な子どもを見ることができ、親同士も交流することができ、子ども同士もともに遊ぶことで学び合うことができる。子どもが小さい子の面倒をみられるようになった、という声も寄せられている。

高崎市のファミリー・サポート・センターは利用料金の問題や、親同士の関係が固定的になってしまっていて、社会性の広がりが少ないことが問題点として明らかになった。倉淵村では自然に恵まれた地域であるにも関わらず、子どもたちの自然体験は少なく、また小さな村だからこそ余計に大きな問題となってしまう不登校児の問題点や、子どもの社会性獲得の難しさを指摘した。

この「0123吉祥寺」は、孤立しがちな親と子どもの「第2の家庭」としての役割を果たし、地域の中で支え合い、育ち合う、地域による子育て支援施設として大変評価できる。親と子の社会性獲得の場として、社会化の場として、こうした自由な「たまり場」としてのコミュニティセンターが、各地域にできることが望まれている。

第4章 諸外国における子育て支援制度

カナダでは、子育て支援は家族支援と考えられ、子育て支援の基本的考え方として、両親が支援を受ける場を選択する権利があるという発想がある。「地域から生まれ、地域のために取り組まれ、そして結果的に個々の家庭の養育力を高めつつ、地域社会としての育児力を高めていく」ことが子育て家庭の支援であると考えられているのであり、子育てをする親の力をつけていくことに支援の主眼が置かれている。「親には親の人生があります。親自身が自分を大切にしてお子にとってもよい親でいられるでしょう」と書かれているのである。このプログラムは日本の孤立した子育てにとっても参考になるものではないか。

親1人に子ども1人というよりも、大人1人に子ども2～3人の割合で世話をした方が、子ども

同士の交流が生まれてよい刺激になると考えられている。交代で子どもの世話をすることによって、親子共にリフレッシュでき、子どもは子ども同士のつき合い方や親とは違う大人を知ることができ、親は親で、自分の子どもだけでなく他人の子どもの性格や生活を見ることによって、視野を広げることができるのである。

スウェーデンでは、すべての子どもに公的な保育サービスが保障されており、保育所は「昼間の家庭」と考えられ、異年齢の子どもが10～15人のクラス編成となっており、子どもの異年齢集団での体験が尊重されている。また、公開保育室（オープン保育所）という形で、専業主婦、育児休暇中の親などの交流の場を設けている。ここでは、保育所とは機能がちがうということを明確にし、スタッフには独自の研修制度もある。そもそもスウェーデンでは、「子どもは社会の財産」という見方には揺るぎないものがあり、教育、児童福祉政策の原則をなすものとなっている。親の責任に加えて、社会、国家は子どもの心身共に健全な成長発展を保障していかなければならないとされている。そのため法の理念としても、子どもは自己の権利を主張できないが故に、社会はまず第一に子どもを保護しなければならないと掲げており、法による援助を強調している。

フランスにおいては、ラ・メゾン・ヴェルト（緑の家）という保育園でも託児所でもない子育て施設がある。この施設は1979年、小児科医のフランソワーズ・ドルトが「人間にとって一番大きな苦しみは孤独であり、一番すばらしいことは孤独を乗り越えて他人の考えを理解し合える能力を持っていること」という自身の考えのもと、心理学者らと共に設立した施設である。心理学者らとともに、乳幼児への対応を充実させることで、成長後に起こす問題の予防を目的として設立された。フランス国内に150カ所あり、0才から4才までの子供と家族の出会いの場となっている。開館は日曜以外の午後2時から7時まで、いつ、誰が訪れてもよく、利用料は無料である。アキュイアンと呼ばれる精神科医、心理カウンセラーなどの専門家が日替わりで詰め、子どもの社会化や親子のセパレーションが円滑にいくための心のケアや、子育てに対して不安や悩みを持っている親のサポートをしている。一日20～50組の親子が利用している。親の子離れ、子の親離れを支援することがテーマで、自由に開かれた空間が広がっている。ここでは、子供が社会に出るための準備、子どもの社会性の獲得を目的としている。フランス国内でも、他に例がない施設であり、自由で自立した形で運営されている民間アソシエーションであるといえる。

ニュージーランドではプレイセンターという乳幼児の親が集まって互いの子どもの世話をする施設がある。このプレイセンターは1940年代のニュージーランドで、育児と親の社会参加の両方を支援する目的で始まった。1999年現在、プレイセンターを利用している子どもは、1万4千人で、保育所6万8千人、幼稚園4万6千人について多くなっている。子どもを預ける親は週に1、2回、センターで子供と遊んで運営にかかわる。この遊びを通じて一定時間の研修を受けると、プレイセンターの保育者（スーパーバイザー＝運営者）の資格を得ることができる。これはプレイセンターの特徴でもある、先生ではなくて親によって運営されるという仕組みである。親が孤立して子育てに悩むことを避けられ、資格を得て社会参加への道も開かれるという仕組みである。プレイセンター

親と子どもの社会性獲得に向けた子育て支援の現状と課題

の中では、様々な遊びの中から子どもが自ら選択して、遊べるような環境が整えられ、異年齢の子どもたちが一緒に自由に遊ぶことができる。ニュージーランド国内には五百か所以上あり、幼稚園や保育園と並ぶ保育施設の柱の一つとなっている。このセンターを日本国内に作るという動きもあり、注目されている施設の一つである。

総括—終わりにかえて—

これからの地方自治体の子育て支援と地域のあり方

- 豊かな子育てと親育ちのできる社会へ -

母親への育児の押しつけにより、密室育児が生まれ、母親の育児不安、子どもの虐待が社会問題として明らかになっている。「母親らしい行動」を暗黙のうちに要請する社会が、育児に困難を抱える母親を孤立させ、子どもも母親と一対一の関係しか知らずに、社会性が失われている状況だといえる。

このような社会状況をふまえ、これからは行政とNPO、子育てをサポートする社会資源の充実と子育て家庭との連携が求められている。

とかく孤立しがちな現代の親と子どもの育児をどのような形で社会化させるかというのは現在の日本において重大な課題であると認識している。育児不安は母親だけの問題ではなく、現代社会が引き起こした問題であるといえる。だからこそ、母親の声に耳を傾け、子どもは社会で育つのだということを再認識し、地域の人々や専門職の人の支援、また行政の支援が欠かせないのである。

【引用文献・参考文献・URL】

- 三沢謙一 他『現代人のライフコース』ミルネヴァ書房 1989
- 大日向雅美『子育てと出会うとき』NHKブックス 1999
- 東洋他編『発達心理学ハンドブック』福村出版 1993
- 斎藤学『アダルト・チルドレンと家族』学陽書房 1996
- 斎藤学『「家族」という名の孤独』講談社 1995
- 『子ども白書』日本子どもを守る会編 草土文化 2002
- 『平成13年度 国民生活白書』内閣府編 2001
- 大崎登志子 他『母性喪失』同朋舎 1988
- 久徳重盛『母原病』教育研究社 1979
- 久徳重盛『続母原病』教育研究社 1980
- 森岡清美監修『家族社会学の展開』1993
- 袖井孝子他『共働き家族』家政教育社 1993
- 小島宏他『諸外国における育児・看護休暇制度 - ドイツ・フランス・スウェーデン』日本労働研究機構 2000
- 坂本優子他『諸外国における男性の育児参加に関する調査研究』日本労働研究機構1998
- 大日向雅美編『こころの科学103 育児不安』日本評論社 2002
- 棚橋昌子『親と子のメンタルヘルス』中央法規 1997

坂本祐子

- 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書 1999
汐見稔幸『親子ストレス』平凡社新書 2000
武田信子『社会で子どもを育てる』平凡社新書 2002
柏木恵子『子育て広場 武蔵野市立0123吉祥寺』ミルネヴァ書房 1997
大日向雅美『母性愛神話の畏』日本評論社 2000
『発達No.84 特集21世紀の子育て支援ネットワーク』ミルネヴァ書房 2000
盛岡清美他『テキストブック社会学(2) 家族』有斐閣ブックス 1977
牧野カツコ他『子どもの発達と父親の役割』ミルネヴァ書房 1996
訓覇法子『スウェーデン人はいま幸せか』NHKブックス 1991
柏木恵子『子育て支援を考える 変わる家族の時代に』岩波書店 2001
『平成12年版 厚生白書』厚生省監修 2000
P・アリエス『<子供>の誕生』杉山光信他訳 みすず書房 1980
落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書 1994
E・バダンテール『母性という神話』鈴木晶訳 筑摩書房 1991
『倉淵村児童育成計画2001』倉淵村住民課 2001
「高崎市ファミリー・サポート・センター」高崎市児童福祉課 2001
上野千鶴子『主婦論争を読む5』勁草書房 1982
『びーのびーの通信No33 2003.1月号』NPO法人びーのびーの
NPO法人「びーのびーの」HP <http://www.bi-no.org>
武蔵野市「0123吉祥寺」HP http://www.parkcity.ne.jp/~m0123hap/kitijyouzi/k_konna.html